

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年10月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万7372トン、前年同月比102.3%、価格は1キログラム当たり303円、同98.2%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万1092トン、前年同月比102.7%、価格は1キログラム当たり271円、同98.9%となった。
- 11月初旬時点で、夏の猛暑の影響により重量野菜と果菜類の出荷が出遅れていたが、12月によりやく回復が見込まれる。野菜全体では西南暖地産が出遅れ、全国的に出回り不足が続き、市場が価格を引き上げる展開が予想される。

(1) 気象概況

上旬は、低気圧や前線が東・西日本を中心に通過することが多く、沖縄・奄美は旬のはじめに台風第18号や湿った空気の影響を受けた。旬平均気温は、北日本を中心に暖かい空気に覆われやすかったため、北日本でかなり高く、東・西日本と沖縄・奄美で高かった。旬降水量は東日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美でかなり多かった。旬間日照時間は、北日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なかった。

中旬は、全国的に暖かい空気に覆われやすく、全国914地点のうち100地点以上で真夏日となった日があるなど、全国で旬平均気温がかなり高かった。旬平均気温平年差は東日本で+2.9℃、西日本で+3.1℃となり、いずれも1946年の統計開始以降、10月中旬として1位の高温となった。旬降水量は、北・西日本日本海側と北日本太平洋側で多く、東日本太平洋

側と沖縄・奄美で少なかった。旬間日照時間は沖縄・奄美でかなり多く、北・東日本で多かった一方、西日本日本海側で少なかった。

下旬は、全国的に暖かい空気に覆われやすく、旬平均気温平年差は北日本で+2.2℃、東日本で+2.8℃、西日本で+3.2℃、沖縄・奄美で+2.8℃となり、いずれも1946年の統計開始以降、10月下旬として1位の高温となった。旬降水量は、22日に南から湿った空気が流れ込んだ宮崎県で線状降水帯が発生するなど、西日本では記録的な大雨となった地域もあった。沖縄・奄美では、期間の半ばに台風第20号や前線の影響を、また期間末には台風第21号の影響を受け、旬降水量がかなり多くなった。旬間日照時間は、北日本では多く、東・西日本では、期間後半に秋雨前線の影響を受け、少ない所が多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り(図1)。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本									
東日本					日本海側	日本海側			日本海側
西日本					太平洋側	太平洋側		日本海側	太平洋側

資料: 気象庁「10月の天候」

1 平年を上回る水準 2 平年並み 3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万7372トン、前年同月比102.3%、価格は1キログラム当たり303円、同98.2%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(10月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	117,372	102.3	91.4	303	98.2	124.3	317	305	288
だいこん	10,046	100.1	91.5	120	88.6	119.4	133	128	104
にんじん	8,253	121.1	101.1	115	53.0	85.1	117	116	113
はくさい	13,109	94.1	81.4	105	97.3	143.5	130	95	97
キャベツ類	15,936	105.7	94.0	128	109.2	149.9	125	123	137
ほうれんそう	1,244	101.1	93.6	700	102.0	117.7	924	743	579
ねぎ	4,968	117.7	98.2	455	83.3	122.0	469	483	423
レタス類	7,750	95.5	93.3	255	116.4	151.1	238	301	238
きゅうり	4,532	88.7	81.9	519	118.4	144.9	491	524	545
なす	2,741	105.4	101.1	397	106.3	115.5	462	385	350
トマト	4,062	125.9	81.2	754	89.3	142.9	760	857	678
ピーマン	1,932	99.9	90.9	618	101.8	147.8	600	649	611
さといも	821	79.7	79.7	370	112.6	116.8	390	382	348
ばれいしょ	7,079	105.1	97.8	118	92.0	94.4	116	119	118
たまねぎ	9,015	101.6	95.0	106	83.1	105.1	103	104	109

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年を2割近く上回った(図2)。

葉茎菜類は、レタスの価格が長野産の切り上がり時期である中旬に価格を上げ、下旬に落ち着いたものの、高値で推移した前年を1割以上上回り、平年を5割以上上回った(図3)。

果菜類は、トマトの価格が後続産地が出揃っ

た下旬にやや落ち着きを見せ、高騰した前年を1割強下回り、平年を4割以上上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が月間を通してほとんど動きはなく、やや高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

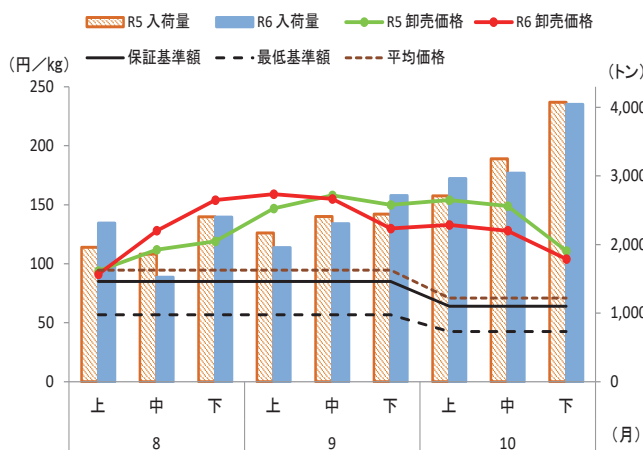


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

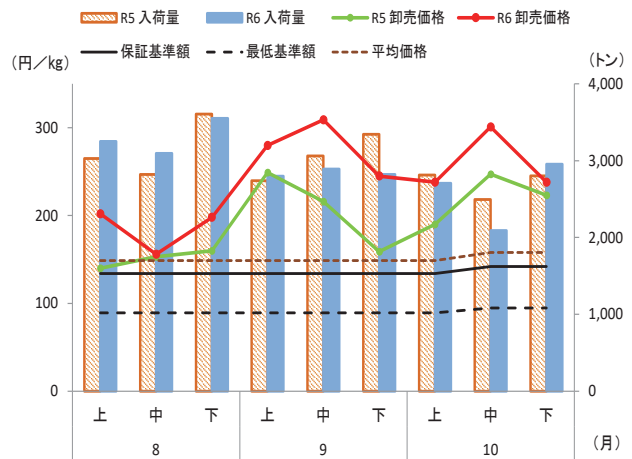


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

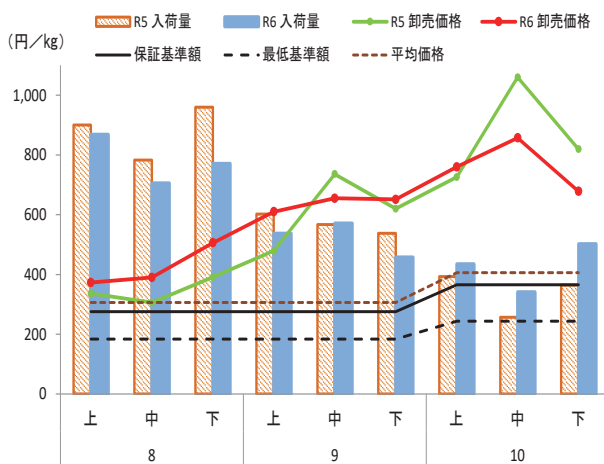
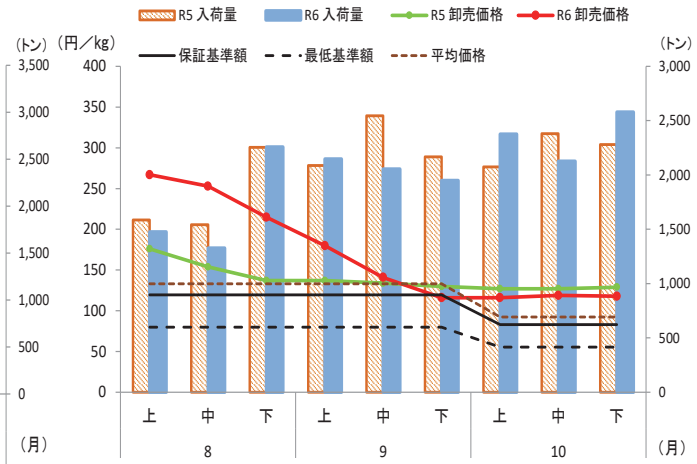


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	青森産、北海道産を中心に千葉産の入荷があった。青森産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育はやや前進傾向であったが、降雨や高温の影響で軟腐病の発生や虫害が散見される。北海道産の作付面積は前年並みで、軟腐病や横縞症などの病害が出ていたが、9月に入ってやや落ち着いた。千葉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響により初期生育の遅延が散見されたが、気温の落ち着きに伴い、生育は回復している。総入荷量は少なかった前年並みとなり、平年を1割近く下回った。 価格は高値で推移した前年を1割以上下回り、平年を2割近く上回った。
	にんじん	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、一部地域でしみ腐病や生理障害が見られたものの、生育はおおむね順調であった。中国産の輸入は前年の4分の1以下となっている。総入荷量は、少なかった前年を2割以上上回り、平年をわずかに上回った。 価格は安定した入荷から月間を通して大きな動きはなかったものの、大幅に高値で推移した前年を5割近く下回り、平年を1割以上下回った。
葉茎菜類	はくさい	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月以降の高温多湿傾向により、軟腐病が多発し品質が低下していたため、残量はそれほど多くなかった。後続の茨城産は遅れており、今後回復傾向が予想されるも、締まりがやや不良である。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を2割近く下回った。 価格は棚替わりと気温の低下により、上旬は堅調な動きとなった。中旬以降落ち着いたが、大幅に高値で推移した前年をわずかに下回り、平年を4割以上上回った。
	キャベツ類	群馬産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。一部で軟腐病、黒斑細菌病が散見されるが大きな問題はない。後続の千葉産、茨城産は定植期の高温・乾燥およびその後の集中的な降雨などにより、初期生育の遅延が見られている。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は堅調に推移し、高値で推移した前年を1割近く上回り、平年を5割弱上回った。
	ほうれんそう	群馬産を中心に、茨城産、栃木産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、8月下旬以降の高温および局地的な豪雨の影響により、生育はやや不良となっている。遅延や発芽不良に加えて虫害も散見された。茨城産の作付面積は前年をやや下回っており、高温のため夏場の生育が良くないことから、小松菜の作付けを増やしているためである。栃木産の作付面積は前年並みで、10月に入り夜温の低下により生育はやや緩慢になっているが、品質は回復傾向であった。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をかなり下回った。 連休明けの増量見込みから棚を広げる動きがあったが、思うように増加しなかったことから堅調な価格が続き、下旬に落ち着いたものの、高値で推移した前年をわずかに上回り、平年を2割近く上回った。

	 <p>ねぎ</p>	<p>北海道産を中心に秋田産、青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、一部病害が散見されるが生育はおおむね順調である。秋田産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による生育停滞から回復し、ほぼ前年並みに戻っているが、黒斑病や葉枯病が多発傾向であることに加え、虫害もやや多い。青森産の作付面積は前年並みで、気温の低下に伴い軟腐病の発生は落ち着いている。後続の関東産の秋冬ねぎは遅れており、11月中は少ない見込みである。総入荷量は大幅に少なかった前年を2割近く上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、不安定な入荷に加え、傷みの発生などから堅調な動きとなり、大幅に高値で推移した前年を2割近く下回り、平年を2割以上上回った。</p>
	 <p>レタス類</p>	<p>茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年をやや下回り、台風により定植作業が遅れ、その後の乾燥でやや小玉傾向となった。長野産は中旬までにほぼ切り上がった。総入荷量は前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>長野産の切り上がり時期である中旬に価格を上げ、下旬には落ち着いたものの、高値で推移した前年を1割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>
果菜類	 <p>きゅうり</p>	<p>群馬産、埼玉産など関東産の抑制物中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、夜温が高かった影響による雌花率の低下、また曇雨天の影響による樹勢低下で流れ果（生育が途中で止まった実）が散見され、増加のペースは遅い。またうどん粉病などの病害が散見される。埼玉産の作付面積は前年並みで、高温と日照不足の影響による流れ果が多発している。虫害はコナジラミの発生が多く、病害も散見され、収量は低調となっている。東北産地は10月上旬までにほぼ切り上がった。総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は絶対量不足から堅調な推移となり、高値で推移した前年を2割近く上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	 <p>なす</p>	<p>高知産を中心に関東産の露地物残量の入荷となった。高知産の作付面積は前年並みで、9月までの極端な高温・少雨で一部初期生育不良が散見される。ヨトウ、コナジラミ類の発生も平年より多くみられる。群馬産の作付面積は前年をやや上回る。虫害は多いが生育はおおむね順調である。栃木産の作付面積は前年並みで、高温・干ばつにより草勢の低下が散見されたが、回復傾向であり、虫害が散見される。総入荷量は、前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、上旬から下旬に向けて徐々に下げたものの、やや高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	 <p>トマト</p>	<p>千葉産、熊本産を中心に北海道産、東北産残量<small>（おつかはまきびょう）</small>の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、抑制物の生育はおおむね前年並みであるが、黄化葉巻病の発生が多い。熊本産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。北海道産、東北産の残量は少なかった前年よりかなり多い。総入荷量は大幅に少なかった前年を2割以上上回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は後続産地が出揃った下旬にやや落ち着きを見せ、高騰した前年を1割強下回り、平年を4割以上上回った。</p>
	 <p>ピーマン</p>	<p>茨城産を中心に岩手産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、遅延していた生育は回復傾向も、一部高温障害の影響で樹勢が低下し、肥大が良くないものが散見される。岩手産の作付面積は前年並みで、一部圃場で虫害が散見されるものの生育はおおむね順調で、残量も前年より多い。後続の高知産は高温少雨による初期着果不良、尻腐れ果が散見される。総入荷量は少なかった前年並みとなり平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は高温による数量不足で堅調な動きとなり、大幅に高値で推移した前年をわずかに上回り平年を5割近く上回った。</p>
土物類	 <p>さといも</p>	<p>埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、10月上旬の降雨の影響により収穫が進まず、中旬から増量し、下旬にはやや落ち着いた。病害の発生が散見されたが、大きな影響はない。中国産の輸入は前年を1割ほど上回っている。総入荷量はほぼ前年並みであった前年を2割強下回った。</p> <p>価格は棚替わりにより動きが良化し、下旬に向けて緩やかに下落したものの堅調な展開となり、前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	 <p>ばれいしょ</p>	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了した。やや干ばつ傾向から早生は小玉傾向であったが、気温の上昇と適度な降雨もあり順調に肥大した。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は月間を通してほとんど動きはなく、やや高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p>
	 <p>たまねぎ</p>	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了した。高温のため、生育は中生までは順調であったが、後続産地は降雨により水分過多の傾向である。中国産の輸入は前年を2割以上下回っている。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は月間を通してほとんど動きはなく、大幅に高値で推移した前年を2割近く下回り、平年をやや上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は4万1092トン、前年同月比102.7%、

価格は1キログラム当たり271円、同98.9%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(10月速報)






品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	41,092	102.7	92.9	271	98.9	124.5	279	268	267
だいこん	3,264	97.5	77.5	133	92.6	125.4	133	133	134
にんじん	3,233	105.5	101.7	103	46.3	76.9	106	108	97
はくさい	6,430	100.7	90.6	106	97.4	144.7	129	94	102
キャベツ類	5,536	102.9	92.0	125	108.0	144.1	118	118	141
ほうれんそう	364	93.2	79.4	888	110.5	124.2	1,097	902	769
ねぎ	1,077	111.4	95.6	586	90.7	122.0	629	589	550
レタス類	1,316	91.5	73.9	290	117.0	168.0	259	352	276
きゅうり	1,040	92.8	86.6	504	117.2	145.0	467	512	546
なす	764	106.6	105.0	404	111.2	122.1	445	405	371
トマト	1,508	150.5	105.5	749	89.7	136.1	752	892	654
ピーマン	551	115.9	103.3	633	102.1	146.0	597	633	672
さといも	125	68.5	63.3	444	134.2	145.0	447	454	436
ばれいしょ	3,232	116.4	115.5	109	98.0	96.8	98	114	117
たまねぎ	4,970	91.7	96.8	114	90.7	110.9	116	115	113

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	10月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	月の前半は北海道産を中心として、青森産、石川産、新潟産の入荷があった。上旬には岐阜産の残量入荷もあった。北海道産と青森産は中旬以降も潤沢な入荷が続き、月間の入荷量は北海道産では前年をかなり上回り、青森産は前年を大幅に上回った。石川産と新潟産は中旬以降に増量したが、太物が少なくB品も多かった。月間全体では前年をわずかに下回り、平年を2割以上下回った。 価格は入荷量が少なく中でもB品が多く見られたことから伸び悩み、月間では高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に上回った。
	にんじん 	北海道産が中心の入荷であった。前月までの生育不良から回復し、太物中心の入荷となり、全旬を通じて入荷量の多い状況が続いた。国産の不足で増えていた中国産は、国産の増加に伴って減少し、単価高もあり10月は前年の1割程度にまで落ち込んだ。月間全体の入荷量は前年をやや上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、大幅な高値だった前年を5割以上下回り、平年を2割以上下回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産が中心の入荷であった。天候不順で生育が悪く、産地出荷量が伸びず、入荷量も伸び悩んだ。下旬には後続の茨城産の早出し出荷が出回り始めたが、入荷量は前年を下回った。月間全体の入荷量は前年をわずかに上回り、平年を1割近く下回った。 量販店でも徐々に売場が作られ、需要期に入中、気温が高く消費は鈍い状況であった。長野産は品薄感からやや高値傾向で推移したが、茨城産は品質低下品も見られ、価格は伸び悩んだ。月間全体の価格は前年をわずかに下回り、平年を4割以上上回った。
	キャベツ類 	群馬産を中心として、主力の長野産、中旬からは後続の茨城産、下旬からは愛知産などの入荷があった。記録的な気温高の影響により後続産地の生育が遅れ、入荷量は茨城産は前年を大幅に下回り、愛知産は前年の3分の1程度に留まった。群馬産の残量で補てんする形となり、月間全体の入荷量は前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。 加工・業務関係からの発注が多く、量販店での特売需要もあり引き合いが強かったことから、価格は高値で推移し、後続産地の遅れにより下旬に上昇した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を4割以上上回った。
	ほうれんそう 	岐阜産を中心に、徳島産などの入荷があった。岐阜産は気温高や長雨の影響による生育不良で、出荷が不安定となり入荷量も不安定だった。後続の秋冬産地の徳島産なども気温高と雨の影響による生育不良で、病害虫の発生も多く出荷が遅れた上、入荷量も少ない状況となった。月間全体の入荷量では前年をかなりの程度下回り、平年を2割以上下回った。 不安定な入荷と後続産地の出遅れから、価格は高値で推移し、月間では前年をかなりの程度上回り、平年を2割以上上回った。

ねぎ (白ねぎ)		<p>長野産と北海道産が主体となり、群馬産や鳥取産の入荷があった。主力産地の出荷は順調で、全旬を通じて潤沢な入荷となった。入荷量は、長野産は前年をかなり上回り、北海道産は大きく上回った。全体では前年を大幅に上回り、平年をやや下回った。</p> <p>量販店でも売場が作られて需要期に入ったが、気温高が続き、この時期としては消費が鈍く、価格は伸び悩んだ。月間では前年をかなり下回り、平年を2割以上上回った。</p>
ねぎ (青ねぎ)		<p>主力の徳島産と香川産が主体となり、高知産や近隣の大阪産、奈良産などの入荷があった。各地ともこの時期としては記録的な気温高から生育不良となり、産地出荷量は不安定で少なく、また品質低下も見られたことから全旬とも入荷量は伸びず、月間全体では前年を下回った。</p> <p>量販店、業務筋のどちらとも荷動きが良く引き合いが強まったことで、高値で推移し、月間では前年をやや上回った。</p>
レタス類		<p>玉レタスは、夏秋産地の裸物の長野産を中心として、中旬以降に後続産地のラップ物の茨城産や兵庫産、裸物の長崎産の入荷があった。気温高の影響により生育も品質も悪く、産地出荷量が少ない状況が続いたが、加工筋からの発注が多く徐々に入荷は増量した。前年も極端に入荷量が少なかったため、前年よりは多かったが、平年を下回った。</p> <p>サニーレタスは夏秋産地の長野産を中心とし、中旬以降に後続の福岡産などが入荷した。玉レタスの入荷量が少なかったため、サニーレタスの発注が増え、入荷量は増えた。リーフレタスは福岡産を中心として、長野産の残量などが入荷した。月の前半は長野産の残量が多く、中旬以降は福岡産の入荷も増量したことから、全旬を通じて入荷は安定し、月間全体では前年をかなり上回った。レタス類全体の入荷量は、玉レタスの不足により前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、玉レタスは不足感から高騰し、月間では前年を大幅に上回った。サニーレタスも引き合いが強まり、前年をやや上回ったが、リーフレタスは加工筋からの発注が少なかったことで販売が苦戦し、入荷量が少ない中でも価格が低迷し前年をかなり下回った。レタス類全体の価格は、玉レタスの不足感が影響し、前年を大幅に上回り、平年を7割近く上回った。</p>
果菜類	きゅうり	<p>群馬産と大阪産が主体となり、後続の宮崎産や高知産と、福島産の残量などが入荷した。各地とも極端な気温高と長雨の影響を受け、夏秋産地の福島産は切り上がり早く、入荷量は前年をかなり下回り、秋冬産地の宮崎産は出荷の出遅れから前年をかなり下回った。他産地も同様の状況で、月間全体の入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。</p> <p>気温高から消費は活発で引き合いも強く、価格は旬を追うごとに上昇し、月間では前年を大幅に上回り、平年を4割以上上回った。</p>
なす		<p>千両系は高知産が中心となり、京都産などの入荷もあった。長茄子は熊本産と福岡産が主体となり、愛媛産の残量の入荷があった。夏秋産地の残量が少なく、秋冬産地が出遅れて産地出荷量が伸びず、端境ができて入荷量は伸び悩んだ。秋冬物は、出遅れたものが入荷は多く、下旬には回復傾向となり、月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年をやや上回った。</p> <p>気温が高かったことにより一定の引き合いがあり、価格は高値で推移し、野菜全体の高値感から旬を追うごとに上昇し、月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p>
トマト		<p>夏秋産地の岐阜産が中心となり、岡山産や愛媛産の残量や、後続の秋冬産地の愛知産や熊本産などが入荷した。気温高が続いたことから、前段の産地は作が長く残量が多く、さらに後続産地は出荷が早まり、出荷が重なったことにより、全旬ともに入荷量が多い状況が続き、月間全体では少なかった前年を5割以上上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、入荷増となったことにより前月までの高値から下落傾向となり、下旬に急落した。月間では極端な高値を付けた前年をかなりの程度下回り、平年を3割以上に上回った。</p>
ピーマン		<p>茨城産が中心となり、宮崎産、愛媛産、高知産などが入荷した。気温高の影響により、夏秋産地は残量が多く産地出荷も順調で入荷増量となり、秋冬産地は出遅れたものの、月間全体では前年をかなり大きく上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は前月までの高値の影響が残り、野菜全体の高値感に加え、気温が高かったことから引き合いが強まり、入荷量が多い中でも旬を追うごとに上昇した。月間では前年をわずかに上回り、平年を5割近く上回った。</p>
土物類	さといも	<p>愛媛産が中心の入荷であった。作柄が悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。国産が少ない分、中国産の入荷量が多く、前年の2倍以上となった。全体としては、少ないながらも季節商材としての一定の需要があり、旬を追うごとに入荷量は微増傾向とはなったが、月間では前年、平年ともに3割以上下回った。</p> <p>価格は、9月の需要期の高騰と野菜全体の高値傾向の影響から高値で推移し、月間では前年、平年ともに大幅に上回った。</p>
ばれいしょ		<p>丸芋は北海道産が中心の入荷であった。大玉傾向で産地出荷は順調であったが、10月に入っても真夏日になる日が続くなど気温高から消費は鈍く、産地価格の上昇とともに需要は落ち込んだ。入荷量は、上旬は前年を大きく上回ったが、中旬には前年を大幅に下回った。メークインも北海道産が中心の入荷であった。小玉傾向で、気温高の影響から需要が鈍く入荷量は伸び悩んだが、月間では前年をやや上回った。月間のばれいしょ全体の入荷量は前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は丸芋、メークインとも前月までの安値から旬を追うごとに上昇したが、発芽なども散見され伸び悩み、月間全体では前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。</p>
たまねぎ		<p>北海道産を中心に兵庫産の入荷があった。前年から続いていた不足感から、入荷増となっていた中国産も引き続き入荷した。兵庫産は産地残量が少なく、入荷量が少ない状況が続いた。北海道産も産地出荷量が多いという状況でもない中、量販店や学校給食からの引き合いが強くなり、産地に対して継続的に出荷要請をかけたため、比較的安定した入荷が続いた。中国産は引き続き皮付き商品の需要があり、前年並みの入荷量となった。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、入荷量が伸び悩む中、野菜類全体の高値傾向もあり引き合いが強かったため、安定した高値で推移した。北海道産の不作による極端に高値であった前年をかなりの程度下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした12月の見通し

夏の猛暑の影響により、重量野菜と果菜類は出遅れていたが、12月ようやく回復が見込まれる。10月中は、全国的に天候不順であったことが影響した。気温高は、はくさいの締まりの悪さを招き、果菜類は花落ちが多く見られ、ねぎは豪雨の影響を受け病気が多発した。また、全国的に害虫被害も多かった。いも類はこれらの影響が少なく、一部の産地を除き順調であった。北海道産・東北産は、秋に好天が続き、10月後半の出荷が前年を上回った。今後は各地の降雪・積雪を見る必要があるが、12月上旬まで残量はあると予想される。野菜全体では12月も西南暖地産が遅れて、全国的に出回り不足が続き、市場が価格を引き上げる展開が予想される。

根菜類

だいこんは、神奈川産の出荷は開始しているが、高温と乾燥の影響により、例年より遅れている。12月は通常通り、Lサイズ中心で出荷できる見込みである。「三浦大根」の作付けは前年並みで、12月23日頃から販売される見込みである。千葉産は3～7日程度の遅れはあるが、11月中旬頃には回復し、11月20日頃にピークを迎え、12月は横ばいで推移することが予想される。作付けは前年並みで、Lサイズ中心を予想している。徳島産は11月7日頃から開始し、11月末頃に本格化し、ピークは12月最終週となる見込みである。中心サイズは当面Lで、作付けも前年並みである。

にんじんは、千葉産の選果が例年どおり11月6日から開始されたが、播種時期の高温や水分不足から生育は良くない。12月にピークを迎え、2月まで続く。作付けは前年並みで、中心サイズはMAである。埼玉産は、8月末から9月上旬の降雨で種が流される被害もあり、播種作業の開始が遅れ、その後の肥大も遅い。12月中旬頃には出荷がピークとなるも、生育は遅れている。そのため、年内は昨年を下回る出荷と予想される。品種は「冬ちあき」「アロマ809」である。香川産の「金時人参」は10月30日から選果が始まり、例年よりやや遅い。東京市場では例年並みの11月10日過ぎから開始し、95%を年内には販売する見込みである。

現状はLサイズ中心であるが、やや細めである。

葉茎菜類

キャベツは、愛知産はこれから増えるところであるが平年に比べ遅れ気味で、10月の実績は前年比30%と大幅に少なかったが、11月下旬には追いつき、11月下旬から12月にかけてピークが見込まれる。冬系中心で、12月には春系も増えてくると予想される。8玉のLサイズ中心である。千葉産は、猛暑と干ばつの影響で7日程度の遅れとなっている。10月の日照不足もあり、11月いっぱいには平年の20～30%少なく、12月に入り例年並みの回復が見込まれる。神奈川県は10月も高温障害が発生し、生育が遅れ気味であるため、11月中旬から出荷の開始が見込まれる。12月にはピークとなり、Lサイズ中心と予想される。

はくさいは、茨城産は徐々に増えてきているものの、猛暑の影響により早期出荷分の作付けを遅らせたことからスタートが4～5日遅れたが、12月には例年並みの出荷ができると見込まれる。

ほうれんそうは、埼玉産は例年どおり出荷されているが、害虫の影響がある。11月に入り増えてくるが、気温高の影響を受け、仕上がりが軟弱気味である。出荷のピークは12月26日以降と見込まれる。群馬産は、暑さの影響で伸びが悪く平年を下回って推移した。12月には平年並みに回復すると見込まれるが、1月には寒さから伸びが止まり12月よりも減少が予想される。

ねぎは、千葉産は、作況が悪かった前年並みに出荷が少なく、猛暑の被害で欠株も見られ、10月の多雨も影響している。12月には増えてピークを迎え前年を上回ると予想されるが、それでも平年に届かない見込みである。茨城産は出荷が少なく、予想よりも回復が遅れている。猛暑と9月の降雨で圃場廃棄が多かった。10月に圃場に残ったねぎは細く、箱数が伸びなかった。11月も生育の回復に時間がかかり、出荷が少ないまま推移しており、本格的な回復は12月に入ってからと見込まれる。群馬産の「下仁田ねぎ」は10月27日から例年並みに出荷を開始した。出荷のピークは12月～1月であるが、猛暑の影響で遅れており、12月の出荷は前年を下回ると予想している。作付けは前年並みである。

埼玉産は2週間遅れで出荷が始まり、12月がピークと予想されるが、前年を下回ると予想される。青森産は昨年は、雪解けも遅く春の定植の遅れにより全体として後半にずれ、その後の太りも悪く20%以上の減収となった。今年は積雪の前（12月上旬）までに収穫を終え、保存しながら年内いっぱいの販売が予想される。

レタスは、香川産は暑さの影響により、例年より定植作業が遅れている。11月に入り出荷は徐々に増え、11月中旬から年内いっぱいが見込みとなる見込みである。虫害が多く、圃場廃棄も多くなっている。作付けは前年並みである。兵庫産は11月中旬から12月いっぱいが見込みとなり、1月も続くがやや落ち着いてくると見込まれる。害虫が多いことが懸念されるが、暖かく程よい降水から前進傾向であり、当面Lサイズ中心と見込まれる。雨が連続と採り遅れて2Lサイズが多くなると予想される。静岡産は、高温傾向と適度の降雨により、生育は良好であるが11月2日の大雨により一部で葉が傷んだ。12月は遅れもなく、2Lサイズ中心に平年並みの出荷が予想される。

果菜類



きゅうりは、宮崎産は曇天が続き日照不足のため生育はやや悪く、花落ちなどの影響により例年の半分程度の出荷となっている。当面のピークは12月で、1月下旬頃には天候の回復により平年並みに戻ると予想している。埼玉産は、加温物と無加温物の出荷で、例年に比べると少なめであり、12月は加温物のみとなるが、例年を下回ると予想している。高知産は、若干少な目の出荷であるが、11月中下旬には平年並みとなることと予想される。11月にいったんピークがあり、12月に再び増加するパターンが予想されるが、量は前年並み・平年並みであると見込まれる。

なすは、高知産は平年並みであるが、前年比では少なめの出荷となっており、10月の夜温が高く、一部で花が少ないとの報告もあり、10月下旬の曇天と気温の急激な低下により、肥大が悪くなっている。12月は前年よりやや減少の可能性が高く、年末から年明けに多少の増減はあるが、特別大きなピークは無いと予想される。福岡産は11月は前年を下回るが、12月にはやや回復に向かうことが予想される。

トマトは、愛知産は高温で花落ちするなどの影響を受け、出荷が少なくなっているが、11月下旬には回復し、12月は前年並みで29日まで販売されると見込まれる。中心サイズはMである。熊本産は出荷量が伸び悩んだものの、裂果の発生は収束してきている。主力の「りんか」が減り「プリマドンナ」が増えている。品種構成の変化も影響し、11月下旬から若干数量は伸びるが、12月に大きなピークは来ないと予想される。

ミニトマトは、熊本産は、猛暑の影響で生育が遅れている。大玉からミニへの転換は、ここ2～3年は収まっており、品種は「千果」と「小鈴」である。12月は年末をピークに、ほぼ平年並みの出荷と予想される。

ピーマンは、茨城産は11月いっぱい終わる秋物は、猛暑の影響で少なかった。12月は温室物となるが、作付けの減少や燃料費の高騰などから前年の80～90%程度を予想している。高知産は出荷が始まっており、台風もなく定植作業も順調であった。高温の影響により実の付きは悪かったが、11月には例年並みに回復しいったんピークとなり、12月には気温も下がり日照時間も短くなるため、やや減少しながら推移すると予想される。宮崎産は猛暑と10月の曇天で例年の60%程度の出荷となっている。12月の初めには回復してくるが、平年に届かない見込みである。大きなピークは2～3月と見込まれる。

土物類



さといもは、埼玉産は年内は12月24日売りを一区切りとする出荷体制である。高温でも灌水できており、今年の作柄は平年作かやや良である。中心サイズは2LとLとなり、全体の30%が越年して販売される。新潟産は「五泉の里芋」が例年どおり10月2週目から始まった。作柄は干ばつで少なかった前年を上回り、平年よりもやや多いと見込まれる。年内は12月25～27日まで出荷があり、年明けも販売が続く。

ばれいしょは、北海道産（道南）の「今金男しゃく」は前年並みで、平年比で3～5%増である。道内は全般的に干ばつ傾向であったが、大きな影響は受けておらず、年明け1月で共選は終了する。LとLMサイズが中心で、やや小ぶりである。北海道産（道央）の「きたあかり」

の収量は前年と変わらないが、今年は品質が前年よりも良好である。北海道の秋の天気は安定し、11月初旬時点で60%以上を販売したが、4月まで販売が継続すると見込まれる。長崎産は12月に入ってから出荷開始の見込みである。作付後の前半は暖かくて生育が悪かったため、その後の降雨も影響し、やや不作気味である。1月に入っても収穫があり、1月いっぱい出荷すると見込まれる。作付けは前年並みであり、「ニシユタカ」はM中心とやや小ぶりを予想している。

たまねぎは、北海道産（道北）は今年の収穫量は前年並みで、平年比では若干少なく、12月は前年並みにLとL大が中心となる見込みである。北海道産（道央）は、猛暑で少なかった前年の10%増の収穫量となっている。今年の天候は適度の降雨があり、Lサイズ中心であった。年明け3月いっぱいまで出荷されると見込まれる。北海道産（道北）の商系によると、晩生品種ほど玉が小さく仕上がりが、その「北もみじ」は全体の40%を占める。早生品種のL大中心から、一階級小さめのLサイズが中心となっている。全道で見通すと、平年比では10%程度下回ると予想される。



その他

ブロッコリーは、香川産は、気温高と雨や乾燥が交互にあった影響により苗が枯れるなどの被害が出た。11月中旬には出荷が前年並みに追いつくと予想されるが、出荷に波が生じ、ピークは年末から2月中旬までと見込まれる。作付けは前年並みである。群馬産は、気温高と天候不順により生育に時間がかかっている。11月中旬には出荷量が前年並みに戻り、年内のピークは12月10日前後と予想されるが、暖冬となる場合は、本来の年明け出荷分が前倒しとなり、ピークが続くことも予想される。

カリフラワーは、福岡産は例年より10日程度遅れの11月10日から出荷が始まると予想される。定植した苗が暑さで溶けたため植え直し、さらに必要な時に降雨がなかったことも影響した。当面の出荷のピークは12月中旬から年明けになる見込みである。

ごぼうは、青森産の収穫は終盤を迎えている。本年産は前年並みで、12月の出荷は前年より

少ないものの、12月をピークに1月までの販売と予想される。例年よりやや細めの仕上がりであるが、作柄としては良い。茨城産は、例年どおり出荷を開始し、年末にかけてピークとなる見込みである。生育は順調で、前年並みかやや多めの出荷が予想される。泥付きの4kg袋で、M・Lサイズが中心となる見込みである。熊本産の新ごぼうは、洗いの2本詰め、135gパックが基本となっている。播種期の猛暑により、半分ほどまき直す必要があった影響により、一週間後ろ倒しとなることを見込まれる。その後の生育は順調に持ち直し、12月中旬から年明け頃がピークになると予想される。

れんこんは、茨城産の出荷は、前年の93%であり、11～12月も、前年比で少なめの出荷と予想される。自然災害の影響はなく、激減することはない。例年と同様、Mサイズが中心と予想される。

かんしょは、徳島産は平年作で、大きさも前年並みである。12月に入ってからピークとなる見込みである。千葉産は「べにはるか」「シルクスイート」が中心となり、作柄は前年並みで、12月26日頃までの出荷となる見込みである。

ながいもは、青森産の掘り採りは、ほぼ平年通り、早くも11月中旬からとなるが、今年は前年ほど細長くない。平年作を予想しており、積雪まで作業を続け、その後貯蔵して販売すると見込まれる。

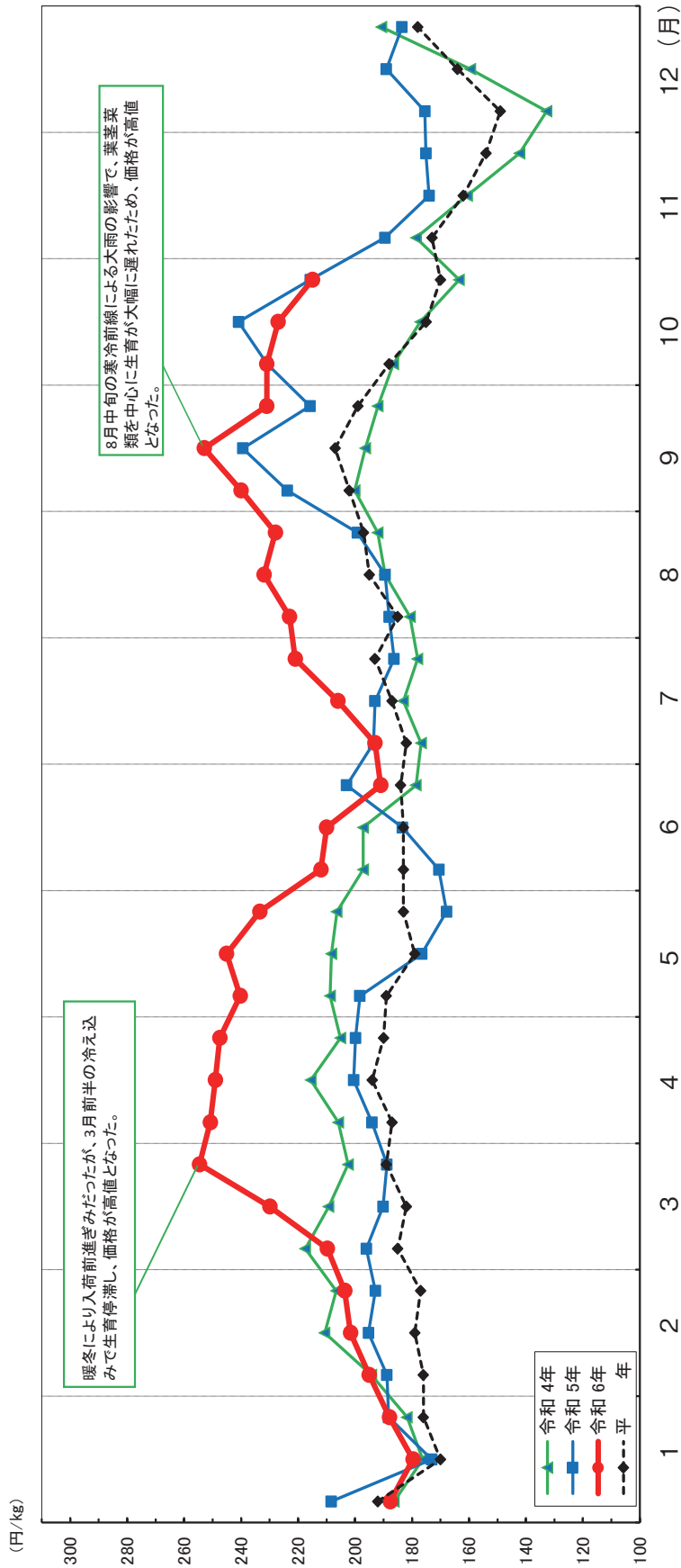
くわいは、広島産は例年どおり11月11日に初出荷を迎える。作付けは前年の82%で、地上部分は育っているものの、試し掘りをする、やや小ぶりであると報告されている。東京市場へは週4回の計画で販売され、12月21日の出荷で切り上がると見込まれる。

七草は、佐賀産は、例年どおり1月1日市場着の物から始まり、その他は4日売りから始まることが予想される。量的に前年並みを予想しており、各野菜とも生育は順調であるが、収穫の人手集めは、これからの勝負である。

（執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

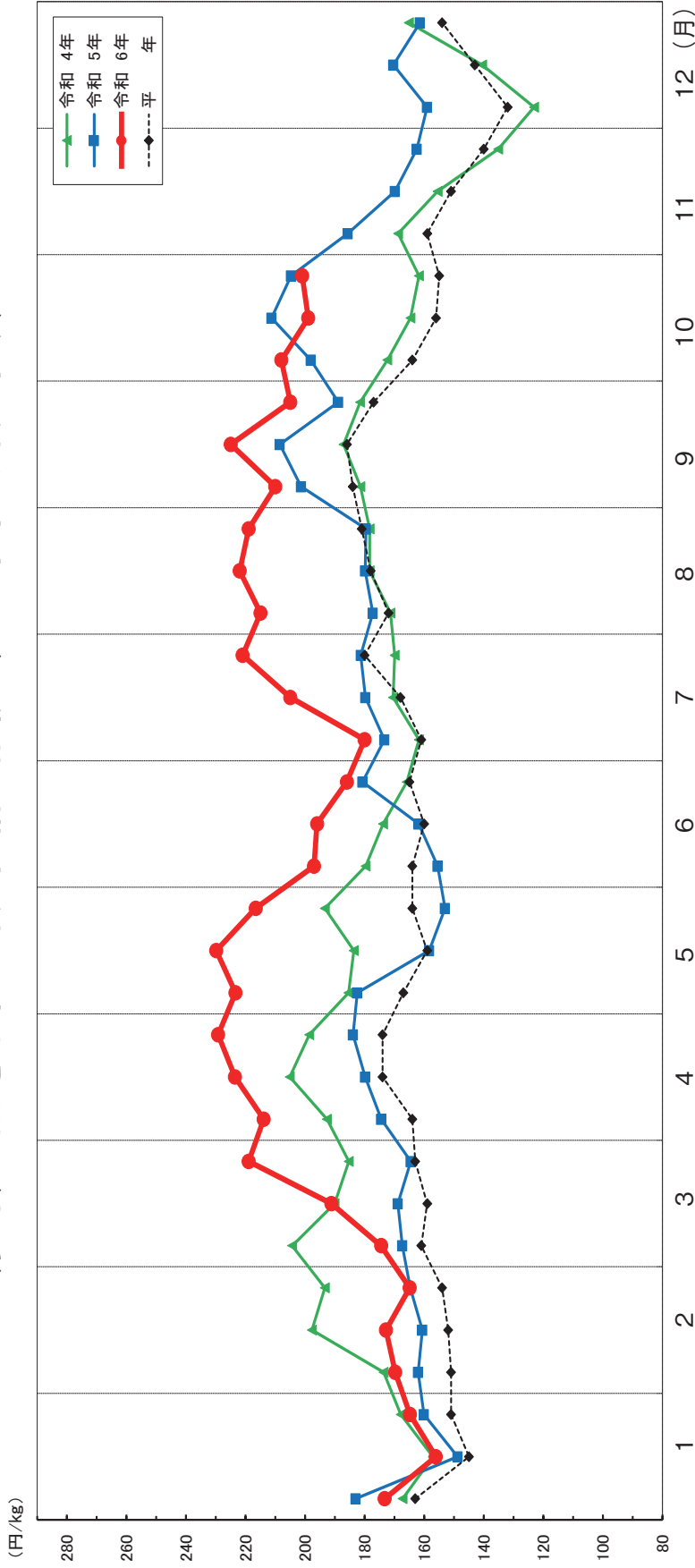
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	179	177	183	178	181	189	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191				
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	189	184	
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215							
平	192	170	176	176	179	177	185	182	189	187	194	190	189	179	183	183	184	182	187	193	185	195	197	202	207	199	188	175	170	173	162	154	149	164	178	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201						
平	163	145	151	151	152	154	161	159	163	164	174	174	167	159	164	164	160	165	161	168	180	172	178	181	184	186	177	164	156	155	159	151	140	132	143	154

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。